

嫉妬の生まれた場所

PS β

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、後に幻想郷で物語を紡ぐことになる少女達の、歩んできた道標。

目次

嫉妬の生まれた場所

時は9世紀初め、幻想郷が外の世界と隔離されるより1000年ほど昔の話。

土蜘蛛である黒谷ヤマメが、地上で好きに行動できた頃の話だ。

悲鳴が聞こえた。

確かあの方角には、5人ほどしかない小さな集落があったはずだ。

妖怪の襲撃でもあったのだろうか。

馬鹿な妖怪がいたものだ。

あんな辺境の集落、壊滅してしまえば二度と人間が来ることはないだろうに。

… そういえば、ここからそう遠くないはずだ。

どれほど馬鹿な奴がいるのか、確かめてみるか。

悲鳴の聞こえた方へ足を進める。

その間、ある違和感を感じていた。

悲鳴が止まない。それどころか、怒号のようなものまで聞こえてきた。

まさか、人間相手にしてやられてるのか…？

そんな馬鹿な話があるか？

5人程度の人間に、妖怪が出し抜かれるなんて。

しかし集落に到着して目に入った光景は、想像していたものとは違うものだった。

食料にされるわけでもなく無残に転がっている3つの死体。

追い詰められる一人の人間の少女。

そして、追い詰めているのも人間の少女だった。

手にはどこから持ってきたのか、刀のようなものを持っている。追いつめられている方は、諦めて目を閉じている。

追いつめている方は…泣いていた。

刀を振り上げる。

「ごめんね」

ザシユツ

最期の言葉は、彼女の手を少し震わせたが、その程度だった。

全てが終わったのを見計らって、あたしは生き残った少女に近づいた。

「派手にやったねー。人を殺したのは初めて？」

「ひっ… あ、あなたは…？」

「通りすがりの妖怪だよ」

「妖怪？私を…殺すの…？」

「ああ、殺すかもしれないし殺さないかもしれない。でも人を殺したのはあんたも同じじゃないかい？」

「…そうね。私も妖怪と大差なかったのかもしれない」

気持ちが落ち着いたのか、彼女の涙は止まっていた。

そして目を瞑り、自分の境遇について話し始めた。

…私は、異民族だった。

里どころか、小さな村へ行っても煙たがられる存在だった。故郷から逃げてきた身、帰る場所も無ければ安息の地も無くて、私は絶望しかけていた。

そんな時、この場所を訪れた。

ここは他の村とは違い、私を受け入れてくれた。

嬉しかった。

今まで優しくされたことなんてなかったから。

この10人程の小さな村で私は暮らし始めた。

新しく家を作るわけもなく、私はある男性の家に住まわせてもらった。

それがあの人との出会いだった。

彼は特に私に優しくしてくれて、すぐに好きになった。

彼も私のことが好きだと言ってくれた。

幸せだけが満ちていた。

でも、村はそうは行かなかった。

元々強い村ではなかったから、別の村や里へ行く人が続出した。

村の人間は4人になった。

その内女は私一人。

不安はあった。

唯一見つけた私の居場所がなくなってしまうんじゃないか。

それでも、彼は私を守ると言ってくれた。

それだけで不安を忘れることができた。

ある時、村の人間が5人になった。

彼女も異民族で、ようやく見つけた居場所だった。

境遇が似ている私たちは、すぐに友達になった。

でも彼女は私とは違い、性格が良くて、頭も良くて、可愛かった。

嫉妬の気持ちはあった。

それでもまだ幸せの方が大きかった。

私には、彼がいたから。

それなのに、いつからか彼は私に冷たくなった。

思わず私は聞いてしまった。

すると彼はこう言ったの。
他に好きな人が出来た、と。
この村に女は私と彼女だけ。
私は納得した。
と同時に、深い絶望と嫉妬が膨れ上がった。
あいつさえ…
あいつさえ、いなければ…
私は… 私たちは…

「そして、今に至ると。なるほどねえ。それで？スッキリした？」
「いいえ。最初から分かっていたの。こんなことしても何にもならな
いって。彼女は最期まで良い人だった…憎いくらいにね。結局悪
いのは、最初から私だけだったのよ」
「ふーん…彼は悪くないのかい？あんたから彼女へと乗り換えた彼
は」
「彼も妬ましいくらいに素直だったわ。私を好きって言ったのも、彼
女を好きだって言ったのも本音なの」
「良く分からないね。それってただの馬鹿じゃないのかい？」
「…それでも馬鹿みたいに彼を愛し続けていれば、こんなことはし

なかったかもしれない。でも私は彼と彼女を憎んだ。彼と彼女に嫉妬した……。いえ、嫉妬しているの。きつと消えることはない……。だから私は、この嫉妬を抱えてこの世界を去ろうと思うの。良かったわね、私はあなたの獲物よ」

「いらないよ、嫉妬に塗れた人間の肉なんて。不味そうだったらありやしない。それに……。けじめくらい自分の手で付けな」

「……あなたも随分とお人好しなのね、妬ましい」

彼女はそう吐き捨ててこの場を去った。

きつとけじめをつけに行っただろう。

私も自分の住処へと足を進めた。

……。彼女が自分で言っていた通り、あの嫉妬は消えることはないだろう。

ただ、それは彼女が命を捨てても同じことだ。

いや、彼女は命を捨てることすらできないだろう。

強大な嫉妬は彼女を喰らい、飲み込み……。やがて妖怪になるだろう。

その後どうなってしまうのかはあたしには分からない。

ただ、彼女ならば……。妖怪として良い人生を送れる気がする。

それが彼女にとって良いものなのかは分からないが。

……。流れる川の音が、どこからか聞こえていた。

何処かの川のほとり。

一人の少女が、その冷たい水に全身を浸していた。目を閉じて微動だにせず、ただ水に浸かっている。

数日後、『人間』は死んだ。

その後、水橋パルスイが地底で暮らすようになるのだが、それはまだ先の話。